

1 研究主題

学び合い 高め合う子どもの育成

～1+1を3にも4にもするための授業改善～

2 主題設定の理由

昨年度まで「つぶやきが飛び交う教室にするために」をテーマに研究を積み上げてきた。全体的に子どもたちが自分の考えや意見をつぶやけるようになってきた。研究授業を通して課題を工夫したり、つぶやきを支えるための支援を工夫したりして見えてきた成果をもとに、日常の授業の中でも子どもたちの学び合いの姿がどのクラスにも見られるようになってきた。

しかし、学び合いがみられるようになってきてはいるが、深まりに甘さを感じた。もっと「質の高い学び合い」ができるようにならないものかと課題が見えてきた。「質の高い学び合い」とは、お互いの考えを認め合って、そこから、もっとこうかな？と高め合ったり、また話し合いながら分からないことを補充し合ったり、グループで話し合ったことをもっとみんなに広げながら深く考えていったりなどといった学び合いである。質の高い学び合いの中には、分からないからこそ、みんなで知恵を出し合って探り合って解決の糸口を見つけ出す楽しみもある。子どもたちが学ぶ楽しさを感じながら探究していく学びだと考える。

昨年度まで取り組んできた課題の工夫でも、やはり課題設定や単元構成をさらに工夫していくことで、子どもたちの興味関心や学習意欲が高まり、質の高い学び合いへつながっていくのではないと思われる。また、教師が子どもたちの考えをつないだり、子どもたちの考えをぐっと深めるような発問を投げかけたり、ヒントの出し方を工夫したりなど、質の高い学び合いへ結びつけるための教師の役割は大きいと考えている。

今年度は、国語と算数を中心にして子どもたちが互いに考えを交流し、お互いの違いを認め合いながら学ぶ楽しさを感じ、協働的に学習に取り組んでいくことを目指して本主題に設定した。

3 研究主題について

「学び合い 高め合う」とは

一人一人がきちんと対話する関係ができている教室で、子どもたちが意見や思いを互いにやり取りすることにより、子どもたち一人一人の学びが充実し、学ぶ意欲が向上することである。互いの考えを交流することで、友だちのさまざまな考えを知り、その良さや違いのわけを考えることで、質の高い学びが生まれる。また、それぞれの学びが大切にされて、互いの声を聴き合い、分からないことも自分と違うことも認め合い、互いが学習を通して成長し合えることを「学び合い 高め合う」と考える。

1+1を3にも4にもするための授業改善とは

ペアやグループワークなどの「協働的な学び」を取り入れることによって全員が活動でき、一人一人の気づきを共有することで互いに学び合える、「互恵的な学び」の授業にする。できない子どもが、できる子どもから学ぶだけでなく、できる子どもができない子どもから学ぶ。「分からない」という問いかけを投げかける子どもの問いに仲間が応答しようとすることで分からない側も分かる側もお互いが学んでいく。

つまり、「分かる」という考えでも、「分からない」という考えでも、まず一人一人が自分の思いや考えを持つことを大事にしていく。どこから分からないのか、どこまで分かるのか、どこが疑問かなど、途中の考えであってもいい。一人一人が少しでも考えを持つことがまず大事である。そこから学び合いが始まる。

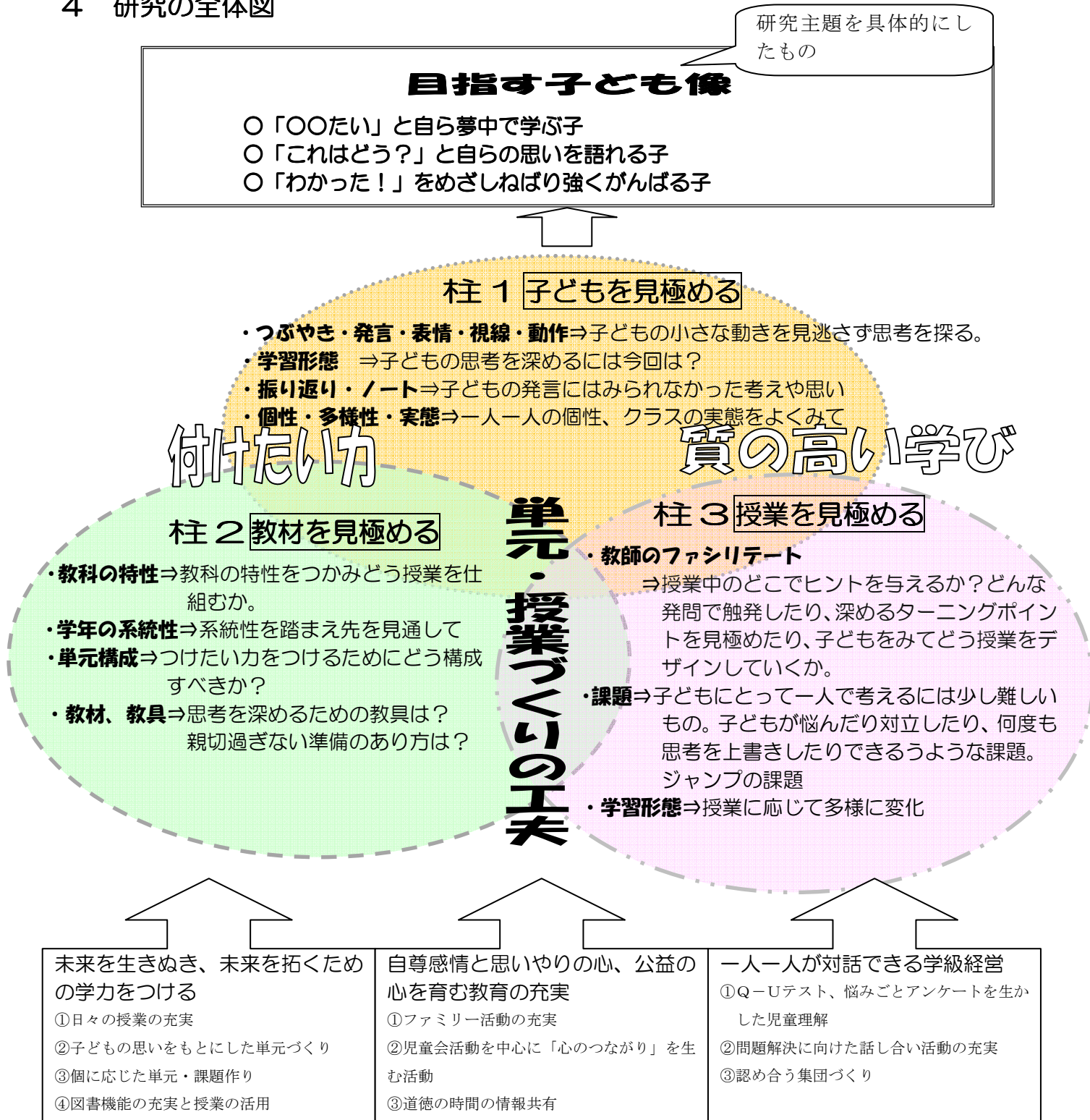
そうすれば、分からない子ども二人いれば、 $0.5+0.5=1$ で、なんとか解決の糸口をつかめたり、さらには $1+1=2$ で答えが2つである学びではなく、さらにお互いが意見や考えを出し合って、2つ以上のたくさんの考えを生み出したり、一人で考えるよりももっと考えが深まったり、もっと発展的に考

えが広がったりする学びができる。友だちと学び合うことで、一人では見つけられない考えが広がり深まったり、新たな発見に出会ったりと、子どもたちが学びの楽しさを感じられる授業を目指していく。

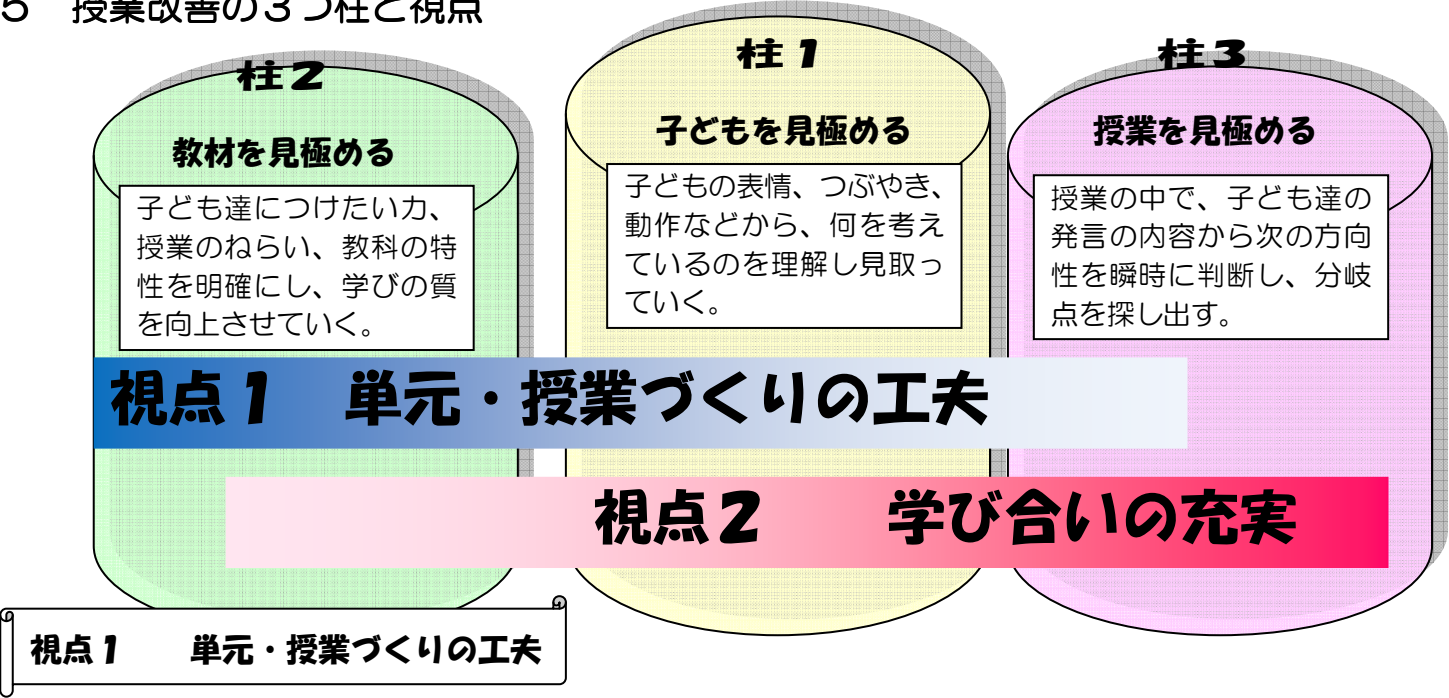
☆「協働的な学び」：ペアやグループワークなどを取り入れ、子どもたち同士が関わり合いながら主体的対話的に学習に取り組む学び

☆「互恵的な学び」：「互恵的とは相互に利益を与え合うさま。協力関係を築き、それぞれ相手に見返りを与えること」である。つまり、子どもたち同士が教える人、学ぶ人という一方的な教え合う関係ではなく、相互に対等な関係で学び合うこと。「分からない」という問いを投げる子のおかげでそれに応答する子どもたちがより確かな学びを達成する。また、「分からない」と問いを投げた子どもが、その問いに応答する仲間たちの助言を媒介に仲間たち以上に確かな学びを達成するような学び。

4 研究の全体図



5 授業改善の3つ柱と視点



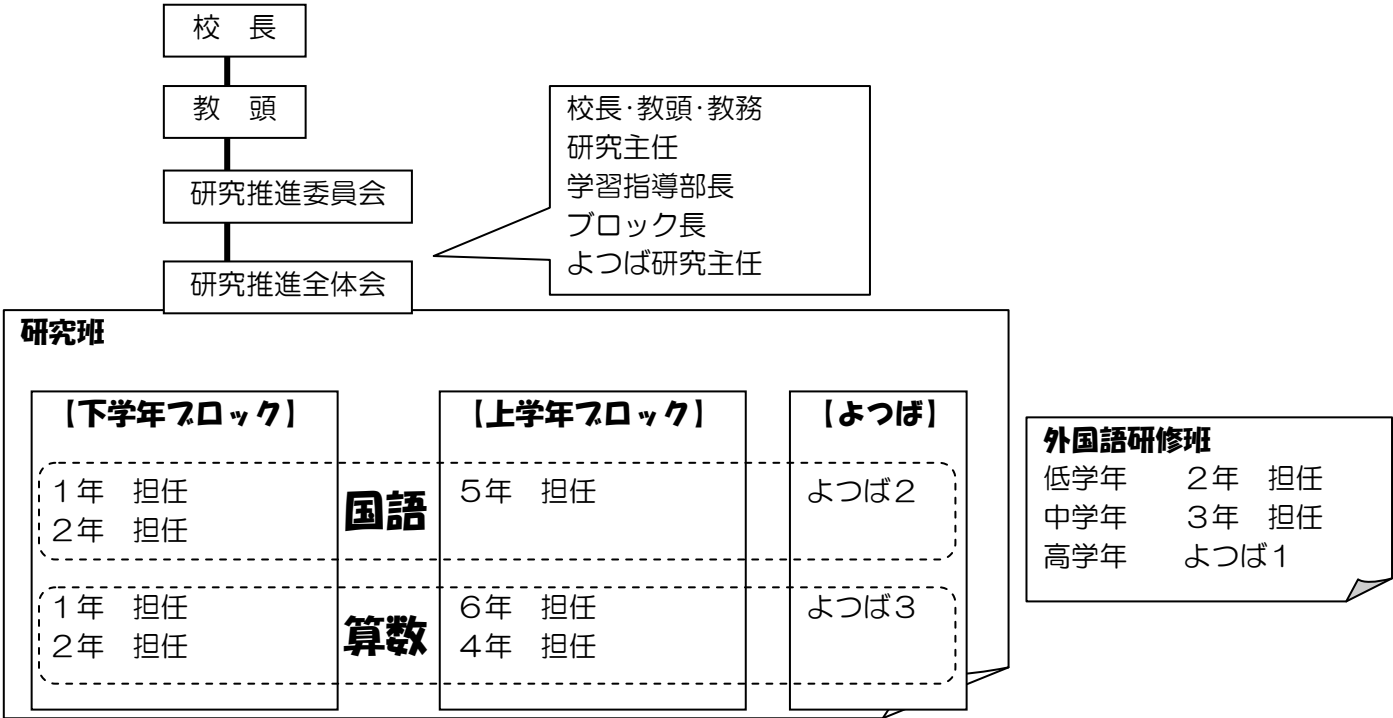
子どもたちの興味関心や学習意欲が高まり、質の高い学び合いにしていく授業にするには、単元や授業づくりを工夫していくことが不可欠である。「児童につけたい力」は何か。そのためにどう単元計画を仕組んでいくか。授業づくりでどのような工夫をしていけばいいのかをさまざまチャレンジしながら授業をどうデザインしていけばいいのかを探っていく。

視点2 学び合いの充実

子どもたちが学びの楽しさを感じながら、学びに夢中になる姿が見られるようにするためにどんな手立てや工夫が必要かを探る。

子どもたちから出てきた意見や考えから次の方向性を判断したり、分岐点を見つけたり、授業の中での教師の関わり方はどうあるべきかを考える。また、子どもたちの学び合いが充実するために何が大事か、学び合う必要感はどこから生まれてくるのか、などを意識しながら学び合いが充実した授業になるために大切なことを探っていく。

6 組織



7 研究の日程

4月16日	月	研究推進委員会			
4月27日	金	全体会			
5月30日	水	研修日	外国語		
6月13日	水	① 下	算数		
		② 上	算数		
8月29日計画訪問	水	3年	算数		
10月10日 ☆3	水	③ 下	算数		
		④ 上	国語		
11月7日 ☆1	水	⑤ 下	国語		
		⑥ よつば	国語 算数		
11月28日 ☆2	水	⑦ 下	国語		
		⑧ 上	算数		
12月		研修	外国語		
1月16日	水	学校研究推進委員会			
1月21日	月	学校研究全体会			

8 授業研究会の持ち方

(1) 事前研

- 各自時間を見て相談しながら事前研を行う。
- 指導案提出期限 ・指導主事・外部助言者等来校の授業研⇒1週間前
・そのほか ⇒前週金曜日まで

(2) 授業参観

- 付箋に研究の視点を踏まえて要点をメモする。(ピンク：よさ ブルー：課題)
- 子どもの姿を中心に語る。
子どもの顔が輝いた場面 子どもの思考が停滞した場面 など
- 授業記録を文書や写真で残す。
・子どもたちの全ての会話を書くのではなく、子どもたちのやり取りの中でポイントとなった言葉やそこからどう活動が展開していったかなど思考や活動の流れを記録する。

(3) 事後研

- 2つの部に分かれて事後研究会を行う。子どもの姿を語りながら本時を検討する。
- 視点の表を拡大コピーし、子どもの様子を書いた付箋をはり、成果や課題を検討していく。
- 2つの部会の話し合い後、全体で集まり、成果や課題を共有する。
- 事後研での話し合いのポイントや収穫をまとめ、次回へ生かせるような研究便りを発行する。
(研究主任)
- 授業者は、自分の授業改善につなげるためのポイントを授業写真を入れながら A4 1枚程度にまとめる。

9 日々の授業改善のために

- ① 外部講師を招いての研修会・・・授業研などに外部から講師を招いて研修し合おう
- ② ミニ授業研・・・普段の授業を公開していこう ⇒「こんなのやってみるのぜひどうぞ」
- ③ マイスターの活用・・・マイスター通信から学んだことを生かしていこう。即戦力に！
- ④ 職員室で普段から授業について語り合おう。⇒よかったこともうまいかなかったことも。